



切り絵『禱り』
比企善彦作

うぶすな

茨木神社社報
発行所
茨木神社社務所
茨木市元町4-3
072(622)2346
[http://www.
ibarakijinja.or.jp/](http://www.ibarakijinja.or.jp/)

「稲」生命のみなもと

今年も満々と水が張られた田に稲の苗が整然と植えられた光景を目にする季節となりました。祖先から受け継いできた日本の原風景です。また全国の神社では田植えに先立ってその年の豊穡を祈る祭（祈年祭）が古来より絶えることなく執り行われてきました。

祈年祭の祝詞の中に「手肘に水沫かき垂り、向股に泥かき寄せて取り作らむ奥つ御年（手の肘に水沫かき垂れ下がり、股にも泥が寄りつくほど苦勞して作る稲）」と表現されているように、辛い労働を経て秋の収穫を迎えます。従って収穫したときの喜びはひとしおで、秋には、感謝の祭・新嘗祭が盛大に斎行されます。戦後、都市化が進み農村型社会は徐々に失われ農村人口も激減しました。稲作と結び付いた自然と命、農耕文化と一体であった美しい日本の心が置きざりにされてきたようにも思えます。

『日本書紀』に天照大御神様が稲をはじめて得られたとき、「これこそ、蒼生（日本人）の食いて生くべきものなり」として、後に「斎庭の稲穂（天上高天原の神聖な稲）」を地上へ天降る皇孫ニギノミコトにお授けになられたと記されています。ニギノミコトというお名前も稲の穂が枝もたわわに、にぎにぎしく繁る状態を願ってのお名前です。斎庭の稲穂とは神々の坐す高天原の稲、この稲を地上に遷し植えて、豊かな稔りに恵まれたわが国を古来より特に「豊葦原の瑞穂国」と讃えて言いました。

この神話こそ神様と稲穂を結ぶ大切な御教えとして語り継いできた日本人の「心」なのです。生命のみなもとである食物はすべて神様からの賜り物、すなわち神々の御靈威がこめられていることに思い至し、ありがたく戴き、御神慮への感謝の気持ちをお忘れはならないのです。

実る程 頭を垂れる 稲穂かな

一粒の米の前に襟を正したかつての心を取り戻したいものです。

シリーズ神道
「服忌」について

時折、身内に不幸があった方から「いつ頃まで鳥居をくぐってはいけないのか」と尋ねられることがあります。

私達日本人は太古の昔から「祖霊」に対する強い信仰があります。

祖先は、未だ見ない子孫を愛で、その繁栄を願って今を生き、死後子孫から追慕され祀られることを期待しました。

「祖霊」は子孫を護り助ける存在であり、子孫は、祖先の守護に対し慰霊するとともに祖先の御霊は代々子孫に受け継がれて今があるという信仰です。

「服忌」は身内の死にあたって祖先に対する信仰（こころ）の具体的な表れと言えます。

我が国では人の死は、極めて忌まわしいことで、遺族にとってもこの上なき悲しく穢（気枯）の状態にあります。この遺族の穢（気枯）が共同体の人々に伝播

しないよう、平常心に回復するまで外部と隔離され忌み籠もりました。中には喪屋・忌屋や殯屋と呼ばれる建物に籠ることもあったようです。

この期間を「忌中」と言い、長くて四十九日又は五十日が多いようです。この日をもつて「忌明」又は「精進上げ」の祭祀や法要が営まれ、以後、通常の生活に戻ります。古代にはこの期間が二年に及んだという記録もあります。

「忌中」ほど嚴重ではないがこれ以後、軽い喪である、身を慎み、祝い等ハレの席を控える「服」の期間が続きます。

身内の者が亡くなると喪に入ります。喪には厳重な「忌」の間と軽い「服」の期間がありますが、この期間は時代によって、地域によって、またその関係によって異なります。明治七年、政府は、それまでの様々な異なつた「忌・服」の日数を統一した「服忌令」を發布しました。それによると例えば、実父母が亡くなられた場合、実子では

「忌」は五十日、「服」は十三ヶ月ですが、その配偶者では「忌」は三十日、「服」は百五十日です。義父母の場合や孫にあつては更に短い日数になっています。（表）

しかし現代の多忙な生活の中では、このような長期に亘る忌みの生活を過ごすことは非常に困難で、「服」の期間が忘れ去られるとともに、大多数の人達はその関係から「忌中」の長短に関わらず「忌明」又は「精進上げ」をもつて全て通常の生活に戻っておられます。

明治政府服忌令
（服忌表）

続柄	忌 間	服 間
父 母	50日	13ヶ月
祖 父 母	30日	150日
配 偶 者 の 父 母	30日	150日
夫	30日	13ヶ月
妻	30日	90日
子	20日	90日
兄 弟 姉 妹	30日	90日
孫	10日	30日
曾 祖 父 母	20日	90日
伯 叔 父 母	20日	90日
甥 姪 ・ い と こ ・ 曾 孫	3日	7日

※地域によって多少の差があります。

末社
皇太神社・多賀神社
の変遷

当神社境内には、ご本殿及び天石門別神社の他に十社の社殿があり、それぞれ年一回定められた日に例祭が執り行われています。

その中で皇太神社では三月十七日に、多賀神社では四月二十日に旧氏子の皆様の参列のもと毎年齋行されています。

この二社はもとと上中条村及び下中条村の氏神様で明治十二年この二村に茨木村を併せた三村が合併して茨木村となりました。

その後、明治政府の神社合祀令により明治四十一年に現在地に合祀・遷されたのでした。そしてかつての皇太神社（上中条村）氏子の皆さんが「上中条村社会」、多賀神社（下中条村）氏子の皆さんが「下中条村保存会」を結成し、かつての氏神様の護持・継承のため尽力していただいています。

この二村は、共に茨木村の村民が移り住み開墾して成立した村です。移り住んだ時代は可成り昔と思われませんが、二村とも村としての独立は豊臣時代と云われます。

両神社の創建年代は不明ですが、当神社明細書によれば、現在天石門別神社東側に鎮座する「皇大神社」が上中条村近くの茨木川傍らに鎮座し、その地を「五十鈴森」、茨木川を「五十鈴川」と呼んだと伝え、茨木城及び城下町形成過程で現在地へ遷されたと記されています。その後、上中条村の人々は、改めて皇大神社を勧請し氏神としたと思われまます。

その後、前述の明治時代の合祀により、ひとつの境内に同じ祭神を祀る皇大神社が二社という珍しい状況となり今日に至っています。



奉賛会だより

去る四月十八日、当社祈年祭に併せ奉賛会厄除安全祈願祭が斎行されました。午後二時より本殿において国家の繁栄と農業の発展、そして奉賛会員と、そのご家族の今年一年の厄除と家内安全を祈願し、宮司が祝詞を奏上。神楽奉納、宮司玉串奏奠の後、参列者を代表して木内奉賛会会長様が玉串を奉奠されました。祭典後、会場を参集殿に移して総会が行われました。

総会では冒頭、四月十四日に発生した「熊本大地震」で犠牲なられました方々に対し黙祷を捧げ、その後、昨年度の事業並びに決算及び本年度の予算等が審議・承認されました。

総会の後、宮司より「茨木の成り立ちとその語源」というテーマで、私たちが住むこの地域がいつ頃、どのような過程を経て「いばらき」と呼ばれるようになったのかについて講話をしていただきました。なお、現在

の会員数は三九三名、会員皆様のご尽力により昨年より十六名の増加となりました。



第八回茨木音楽祭

音楽を通じてまちを元気にしようという思いで始まった「茨木音楽祭」が去る五月五日のこの日に開催されました。第八回目となる今年は今会場も十七ヶ所に増えミュージシャンもプロ・アマ併せて百三十組を超えらるまでになりました。当神社も市内十七会場のひとつとして五月晴れのもと終日多くの人々で賑わいました。

境内では、普段参拝者の憩い



の場である休憩所と儀式殿前の二ヶ所にステージが設けられるとともに、境内各所にブースが設けられ茨木地産の野菜などの食品の販売や、巨大な機織り機による機織りの体験、その他様々なワークショップなど楽しい催しも同時に行われました。



義捐金箱の設置

去る四月十四日に発生しました「熊本大地震」では多くの尊い命が犠牲となり、またその後も頻発する余震のため、今だ多くの方々が避難所生活を余儀なくされ、元の生活に戻ることができないといった状況が続いています。

当社ではすこしでも復興の役に立てればと、義捐金箱を設置いたしましたところ、二週間と短い期間ではありましたが、皆様の心温かいご支援を賜り、六万八千五百五十一円の募金が寄せられました。誠にありがとうございます。

この義捐金は被災された方々の救済に役立てられるべく、日本赤十字社に送金させていただきます。

被災された方々に衷心よりお見舞いを申し上げますとともに、犠牲になられた方々に心より哀悼の意を表します。
被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

梅園の整備

平成三年に、今上陛下御即位を奉祝する平成御大典事業の一環として整備した梅園が長年の風雨や老木であったこと等により、数本が枯れてしまい、寂しい状況になっていました。



この度若木を新たに植樹し、また幹が傷んでかろうじて自立していた木々も補修を行い、さらに土壌には薬液を注入して養分の豊富な土壌に改良しました。来春、見頃となる初春には、だれ梅、紅梅、白梅が咲き誇り、梅香漂う美しい梅園として参拝者の目を楽しませてくれることでしょう。

これからの主な神事

◆大祓神事

六月三十日

午後二時齋行

人形祓い

茅の輪くぐり

厄除神楽

茅の輪守・粽授与

◆夏祭

七月十三日・宵宮

十四日・本宮

午前十時齋行

神輿渡御 神楽奉納



◆末社事平神社例祭

九月十日

◆例大祭（秋祭）

十月十日午前十時齋行

◆七五三詣

十一月中随時

祈禱者にお守り

おみやげ授与



◆末社恵美須神社例祭

十一月二十日

◆天石門別神社記念祭

十一月二十二日

◆新嘗祭

十一月二十三日

◆大祓・除夜祭

十二月三十一日